様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２４日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19330211
研究課題名（和文）
広汎性発達障害児への包括的な教育支援プログラムの開発
研究課題名（英文）
A study of Educational program for students with Pervasive Developmental Disorders

研究代表者
渡部匡隆（WATANABE MASATAKA）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：30241764

研究成果の概要（和文）：
本研究は、知的障害を伴わない広汎性発達障害児への包括的な教育支援プログラムの開発を目的とした。研究では、１．広汎性発達障害の心理特性とアセスメント方法の開発、２．広汎性発達障害児への指導プログラムの開発、３．広汎性発達障害児の関係者への支援プログラムの開発、４．広汎性発達障害児への教育支援システムの調査を行った。
本研究により、学齢段階において主に通常学級に在籍する知的障害を伴わない広汎性発達障害児への教育支援プログラムを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
This study was developed the educational program for the student with High Functioning Pervasive Developmental Disorders (HFPDD). The study consisted of four pieces of research. 1) Development of psychological assessment method for HFPDD. 2) Development of teaching program for student with HFPDD. 3) Development of support program for the relevant people of students with HFPDD. 4) Examination of Educational system for students with HFPDD. It was evident that Educational program for student with HFPDD enrolled in the regular class.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１９年度	2,100,000	630,000	2,730,000
平成２０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成２１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	4,300,000	1,290,000	5,590,000

研究分野：心身障害学・特別支援教育
科研費の分科・細目：特別支援教育
キーワード：特別支援教育・行動障害・広汎性発達障害・治療教育・包括的支援

１．研究開始当初の背景

広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorders，以下、PDDと略す）は、自閉症（autism）やアスペルガー障害（Asperger's disorders）などを含む、脳の機能障害を基盤とした社会性や対人関係、コミュニケーション、固執性や想像性に顕著な障害をもつ。

広汎性発達障害児は、社会参加に著しい困

難をもつため、幼児期から青年期・成人期に至る系統的で一貫性のある教育支援プログラムの必要性が指摘されてきた。そして、これまでに、主に中・重度の知的障害をもつ広汎性発達障害児を対象に教育支援プログラムが開発されてきた。

ところが近年の疫学調査から、知的障害をもたない広汎性発達障害の出現率は、広汎性発達障害全体の約50％を超え、しかも、その多くが通常学級に在籍し、専門的な指導・支援が得られないままいじめの対象となったり、暴力的な行動を繰り返したりするなどの問題が指摘されるようになった。

また広汎性発達障害のある人が関係したとされる犯罪事件も報告されるなど、学校や地域において不適応を抱え、孤立感を強めている知的障害を伴わない広汎性発達障害児者の実態と、地域生活のためのサポート体制の充実と広汎性発達障害の理解を含めた学齢期からの教育支援の必要性が協調された。

「特別支援教育を推進するための制度の在り方」（中央教育審議会答申・平成17年12月８日）においても、通常学級に在籍している高機能自閉性障害やアスペルガー障害などの知的障害を伴わない広汎性発達障害児への対応は喫緊の課題とされた。

２．研究の目的

本研究では、通常学級に在籍する知的障害を伴わない広汎性発達障害児の教育支援プログラムの開発をねらいとした。

プログラム開発では、特に以下の点に留意した。第１に、学校や社会における著しい困難さが主に小学校中学年から出現し、いわゆる２次的な障害の併存とあいまって中学・高校段階までの持続するため、小学校中学年から高校段階までをプログラム開発の対象とすること。

第２に、広汎性発達障害児の教育支援においては、広汎性発達障害のある児童生徒だけでなく、共に生活する、または指導・支援を担う保護者や級友、指導者・支援者も強く支援を必要としている状態にある。そこで、当該の児童生徒に対する専門的な指導プログラムだけでなく、彼らを取り巻く重要な人々に対する専門的な支援プログラムの開発を含めること。

第３に、広汎性発達障害への教育支援は、長期にわたる一貫性や系統性、すなわち教育支援の質の確保が重要となる。日本の学校教育において、広汎性発達障害児への教育支援プログラムの実施に加えて、それらを質的に保障していくことは難しい現状があるが、今後、それらを実現していくためのシステムや方法について検討すること。

以上をもとに、通常学級に在籍する知的障害を伴いない広汎性発達障害児を対象に、小学校中学年から高校段階にかけて、広汎性発達障害児及び彼らを取り巻く重要な人々を対象に、支援の質的な保障も念頭にした教育支援プログラムを包括的として、その開発を目的とした。

３．研究の方法

広汎性発達障害児への包括的な教育支援プログラムの開発に、次の方法から取り組んだ。

（１）研究１「広汎性発達障害の障害特性の解明と心理アセスメント方法の開発」

医療機関において自閉症、あるいはアスペルガー障害と診断された知的障害を伴わない10名の児童生徒を対象に、臨床研究を実施した。年齢範囲は、小学校３年生から高校３年であり、いずれも通常学級に在籍していた。

それらの児童について、標準化された検査に加えて、新たに開発した尺度を加えて、その特性の解明と心理アセスメント尺度の開発を行った。

（２）研究２「広汎性発達障害児に対する指導プログラムの開発」

小学校３年生から高校３年生までの知的障害を伴わない広汎性発達障害のある児童生徒10名を対象に、大学での臨床研究を行った。それぞれの児童生徒に実施した個別及び小集団での指導から、人間関係の形成において必要な指導プログラムの開発を行った。

指導プログラムは、単一事例実験計画法をもとに評価し、効果と指導のために必要な環境設定、方法、手立てについて明らかにした。

（３）研究３「広汎性発達障害児への支援プログラムの開発」

広汎性発達障害児とかかわる保護者などの重要な人々を支援するための支援プログラムについて実践研究を行った。支援内容は、保護者やきょうだいへの支援、級友への支援、教師支援、それに余暇支援であった。対象となった児童・生徒とその関係者が生活する地域、学校をフィールドとして支援を行い、支援プログラムが有効に機能するための方法や留意点について検討した。

（４）研究４「広汎性発達障害児への教育支援システムの実地調査」

アメリカのカリフォルニア州とニュージャー州への調査研究を行い、広汎性発達障害児とその取り巻く人々への教育支援のシステムと管理方法について検討を行った。

４．研究成果

（１）研究１の成果

広汎性発達障害児の心理特性を的確に把握し、適切な指導課題を明らかにするために必要な心理アセスメント尺度について、表１のとおり明らかにすることができた。

表１．心理アセスメント尺度

目的	尺度名
症状評定	日本自閉症協会版　PARS
	広汎性発達障害評定尺度
発達・社会生活能力	KIDS 乳幼児発達スケール
	新版 S-M 社会生活能力検査
知的発達・情報処理能力	WISC-Ⅲ
	K-ABC
学力	田研式標準学力検査
社会性	心の理論課題
	社会的理解課題（*）
	バロン・コーエンストーリー課題
	こぐま社ストーリー課題（*）
	道徳性知識課題
対人関係	対人的相互作用尺度（*）
自己認知	自尊感情尺度
	自己評定尺度
行動観察	直接観察フォーム（*）
生態学的調査	学校環境調査フォーム（*）
	家庭環境調査フォーム（*）
	地域環境調査フォーム（*）
	生活スケジュール調査票（*）

なお、※印の尺度は、本研究において新たに開発された尺度である。また、心理アセスメント尺度の組み合わせ（テスト・バッテリー）方法は、本研究の成果にもとづいている。

（２）研究２の成果

広汎性発達障害児への指導プログラムを、人間関係形成プログラムとして表２のように明らかにすることができた。

表２．指導プログラムの概要

指導領域	指導目標	指導プログラム
信頼関係かかわり	信頼関係	先生と仲良くなる
	話を伝える	身体を使って伝える
		端的に話す
		表現豊かに話す
		文で伝える
	話を理解する	最後まで聴き取る
		ポイントを聴き取る
		文から読み取る
	協調して決める	多数決で決める
		理由を見つける
		みんなで討論する
遊び	平行遊び	同じ活動に参加する
	共同遊び	ゲームに参加する
		友だちを誘う
		リズムにのる
	見立て遊び	見立てて遊ぶ
	協調遊び	ルールを守って遊ぶ
		勝敗を楽しむ
状況理解	視点を変える	相手に気づく
		表情・感情に気づく
		意図に気づく
	状況を読み取る	複数の事実を捉える
		場面を捉える
		文脈を捉える
		場面を判断する

人間理解	自己理解	好き嫌いを知る
		長所短所を知る
		気持ちを知る
		考え方、捉え方を知る
		価値観を知る
		自分の支えを知る
		原因の捉え方を知る
	他者理解	好き嫌いを知る
		長所短所を知る
		気持ちを知る
		考え方、捉え方を知る
		価値観を知る
		その人の支えを知る
		原因の捉え方を知る
自己決定（自分らしさの発揮）	自分の意思を表明する	やりたいことを選ぶ
		意思を発表する
		権利を主張しよう
	計画を決めて実行する	お金の使途を決める
		日程を決める
		活動時間や活動内容を決める
		行く場所、人、行き方を決める
	集団の中で自分の意思を表明する	やりたいことを選ぶ
		お金の使途を決める
		日程を決める
		活動時間や活動内容を決める
		行く場所、人、行き方を決める
生活づくり（生活の中での問題解決力）	人間関係	友だちのこと
		自分のこと
		家族のこと
	社会生活	生活スケジュール
		学校生活
		通学・通所
		家庭学習
	人生設計	進路
	困った事態	緊張事態
		いじめ

なお、指導プログラムは広汎性発達障害児への人間関係形成プログラムとして刊行作業を進めている。

（３）研究３の成果

広汎性発達障害児の支援プログラムとして表３のとおり明らかにすることができた。

表３．支援プログラムの概要

対象	プログラム
保護者	行動の理解と対応
	心理的支援（自己理解）
きょうだい	きょうだい会
	仲間づくり（小学生）
級友	自己理解（小学生）
	自他理解（中学生）
	行動の理解と対応
教師	授業づくり
	チーム支援
余暇	長期休暇

（４）研究４の結果

広汎性発達障害のある一人一ひとりの教育的ニーズに応えるためには、個の独自性と多様性を認め、尊重し、それを肯定的に捉えるなかでその独自性と多様性に応えていくための基盤づくりが求められる。

例えば、ニュージャージー州では、知的機能が高くても自閉症であるとその児童はフルタイム特別支援学級で学習を受けていた。今回、カリフォルニア州とニュージャージー州を訪問し、広汎性発達障害児への教育についてそれぞれの州でその進め方に違いがあることが確認できた。しかし、その州毎に多様性はあるものの、いずれの州でもIDEAは遵守されていた。

また支援内容を考えていくとき、最小制約環境の実現という原則のなかで、一人ひとりに必要な特殊教育プログラムと関連サービスが設計され、IEPに盛り込まれていくことも共通していた。加えて、支援及び支援の質の管理・運営に対する考え方や対応についても共通していた。すなわち、一人一人の教育的ニーズに応えていくための基盤づくりがきちんと行われていると考えた。そのことが、広汎性発達障害児の特別なニーズに応えることを可能にしていると考えられた。

日本では、特別支援教育の充実のために校内委員会などの校内支援体制の整備、特別支援学校のセンター化、さらに支援員をはじめとした多様な人材と活用と関係機関との連携

が進められてきている。しかし、それらを進めていくための共通の理念、仕組み、管理・運営、人材の確保と養成・研修の部分についてほとんど検討されていない。

特別支援教育が充実し、一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な教育を実現していくためには、通常の学級での指導形態や指導上の配慮、通常の学級での学びを支援するためのさまざまな関連サービス、家庭へのサービス、親へのサポートと親教育、チーム支援と連携を支える仕組みなどの充実に加えて、支援のための原則、効果的な支援や支援の質を管理・運用していくための仕組みづくりについても十分に検討していく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

１）岡村章司・渡部匡隆・大木信吾（2009）アスペルガー障害児の算数テスト場面における課題従事行動の支援－自分で見いだした解答方略を活用した自己管理の効果の検討－．特殊教育学研究，47，155-162．（査読有り）

２）渡部匡隆・江口真美（2009）通常の学級における広汎性発達障害のある児童と級友との社会的相互作用の支援．行動科学，48，11-22．（査読有り）

３）由谷るみ子・渡部匡隆（2007）知的障害養護学校における夏期休業中の余暇支援に関する検討―保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から―．特殊教育学研究，45，195－204．（査読有り）

〔学会発表〕（計 24）

１）渡部匡隆・岡村章司・肥後祥治・有川宏幸・小林重雄：広汎性発達障害児への　治療教育の展開（３）－地域生活支援を中心に－．日本特殊教育学会．2009 年９月 21 日．宇都宮市．

２）熊谷正美・渡部匡隆：特別な支援を必要とする生徒への共通理解を促す支援方法に関する研究－中学校でのケース会議の実施とその効果に関する検討－．日本特殊教育学会．2009 年９月 20 日．宇都宮市

３）岡村章司・江口真美・渡部匡隆：高機能自閉症児の協調スキルの形成－活動内容を決定する話し合い場面を通して－．日本特殊教育学会．2009 年９月 20 日．宇都宮市．

４）若林麻衣・渡部匡隆：広汎性発達障害児における社会的視点取得の特性に関する研究．日本特殊教育学会．2009 年９月 20 日．宇都宮市．

５）渡部匡隆・江口真美・岡村章司：高機能自閉症児におけるスピーチスキルの形成．日本特殊教育学会，2009 年９月 20 日．宇都宮市．

６）岡村章司・渡部匡隆：アスペルガー障害のある生徒に対する自己決定への支援法の検討－「夢をかなえてみようプロジェクト」を通して－．日本自閉症スペクトラム学会．2009 年８月 30 日．福井市．

７）岡村章司・渡部匡隆：いじめを受けたアスペルガー障害児へのカウンセリングによる支援．日本カウンセリング学会．2008 年 11 月 23 日．東京．

８）渡部匡隆・岡村章司・安達潤・井上雅彦・衛藤裕司・小林重雄：広汎性発達障害児への治療教育の展開（２）－社会性の障害とその支援を中心に－．日本特殊教育学会．2008 年９月 20 日．米子市．

９）江口真美・渡部匡隆：広汎性発達障害児の社会性の支援に関する研究―通常の学級における級友とのかかわりの実態と仲間づくりプログラムの効果の検討―．日本特殊教育学会．2008 年９月 21 日．米子市．

10）福田正美・岡村章司・渡部匡隆：通常学級での授業参加に困難を示す児童生徒への初期的な教育的アセスメントの方法論に関する検討．日本特殊教育学会第．2008 年９月

21 日．米子市.

11）多鹿実江子・岡村章司・渡部匡隆：特別な教育的ニーズのある生徒への学習支援－ABC教育法の実践－．日本行動分析学会．2008 年８月９日．横浜市.

12）山本弘・渡部匡隆：「学校不適応」に対する早期予防的プログラムに関する研　究－学級単位のソーシャルスキル・トレーニングの手法を活用して－．日本行動分析学会．2008 年８月９日．横浜市.

13）森一也・大木信吾・岡村章司・渡部匡隆：知的障害を伴わない自閉症児の話し合い場面における聞き取りスキルの形成．日本行動療法学会．2007 年 12 月１日．神戸市.

14）岡村章司・渡部匡隆：行動カウンセリングを用いたAD/HD児の問題解決行動を高める支援の検討．日本行動療法学会．2007 年 12 月１日．神戸市.

15）山田かおり・渡部匡隆：中学生の自他理解を高める共学プログラムの実践的研究－特別な支援を必要とする生徒が在籍する通常学級における試行的検証－．日本行動療法学会．2007 年 12 月１日．神戸市.

16）江口真美・岡村章司：広汎性発達障害児の特別な教育ニーズの把握に関する研究－支援目標を立案するための教育アセスメントの開発－．日本 LD 学会．2007 年 11 月 24 日．横浜市.

17）渡部匡隆・岡村章司・井澤信三・松岡勝彦・小林重雄：広汎性発達障害児の治療教育プログラムの展開．日本特殊教育学会．2007 年９月 24 日．神戸市.

18）深澤しのぶ・西野夏枝・岡村章司・渡部匡隆：「高機能」自閉症児への相談スキルの形成－おやつ作りの話し合い場面を通して－．日本特殊教育学会．2007 年９月 23 日．神戸市.

19）西野夏枝・江口真美・森一也・岡村章司・渡部匡隆：発達障害のある中学生に対する自己決定の支援―本人活動グループの実践から－．日本特殊教育学会．2007 年９月 23 日．神戸市.

20）岡村章司・若林麻衣・渡部匡隆：広汎性発達障害児における自己理解の支援に関する検討（2）―自己の好みや感情の理解を中心に－．日本特殊教育学会．2007 年９月 23 日．神戸市.

21）若林麻衣・岡村章司・渡部匡隆：アスペルガー障害児の社会的状況理解の特性に関する研究．日本特殊教育学会．2007 年９月 23 日．神戸市.

22）山田かおり・大貫努・岡村章司・渡部匡隆：発達障害のある生徒の母親への心理的支援に関する検討―母親の自己と子ども理解を高めるプログラムの実践から．日本特殊教育学会．2007 年９月 23 日．神戸市.

23）大貫努・渡部匡隆：特別な支援を必要とする生徒の早期発見への支援．日本特殊教育学会．2007 年９月 23 日．神戸市.

24）高橋奈津実・渡部匡隆：アスペルガー障害児の教科学習における課題従事行動の支援．日本行動分析学会．2007 年８月４日．新座市.

６．研究組織

（１）研究代表者

渡部　匡隆（WATANABE MASATAKA）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：30241764

（２）研究協力者

岡村　章司（OKAMURA SHOUJI）
横浜市立港南台ひの特別支援学校・教諭
大木信吾（OUKI SHINGO）
社会福祉法人くるみ会・児童指導員